

日進月歩するデジタル製品を、「使い勝手」ではなく、「実装された新技術」と「製品の革新性」をテーマにレビューしていくコーナー。

石井英男

MUSIC-HDD W41T (au)

「au LISTEN MOBILE SERVICE」 に対応した日本初のHDD搭載ケータイ

HDD搭載により音楽プレイヤーとしての実用性が大きく向上

auのMUSIC-HDD W41T(以下W41T)は、4GBのHDDを搭載したケータイだ。海外では、HDD搭載ケータイがサムソンやノキアから発売されているが、国内では東芝製のW41Tが初めてだ。

auは、これまで「着うた」や「着うたフル」といった音楽コンテンツに力を入れてきているが、その集大成ともいえる総合音楽サービスが「au LISTEN MOBILE SERVICE」(以下LISMO)。W41Tも、このLISMOに対応している。LISMO対応ケータイは7機種発表されているが、HDDを搭載した機種はW41Tのみだ。

LISMOでは、圧縮率の高いHE-AACコーデックを採用しているため、AACを採用するiPodシリーズに比べて、楽曲データのサイズが小さくてすむ。4GBもの容量を持つW41Tの場合ならば、約2000曲もの楽曲を保存できることになり、音楽プレイヤーとしての実用性は従来のケータイに比べ飛躍的に向上している。

日頃ケータイと音楽プレイヤーの両方を持ち歩いている人も多いだろうが、W41Tならばこれ1台で済むことになる。

パソコンとケータイとが一体になった音楽環境

LISMOはiPodとiTunesに代表されるような音楽プレイヤーとPCとのシームレスな連携を、ケータイでも実現したものだ。

LISMO対応ケータイでiTunesに相当するソフトが「au Music Port」だ。au Music Portで音楽CDをHE-AAC形式の音楽ファイルに変換してUSB経由でLISMO対応ケータイに転送したり、Music Port自体で音楽を聞いたりもできる。

4月からは新たにパソコン向けの音楽配信サイト「DUOMUSIC STORE」がスタートする予定だ。DUOMUSIC STOREは、iPodにおけるiTunes Music Storeに相当する位置づけで、au Music Portの上からメニューを見ながら、気に入った音楽を直接購入できるようになる。

一方のLISMO対応ケータイには「au Music Player」と呼ばれる音楽プレイヤーアプリが搭載されており、au Music Portから転送した楽曲やケータイ本体でダウンロードした「着うたフル」は、このアプリで再生する。ケータイを閉じたままでもMusic Playerの操作はできるので、携帯機器としての完成度は高い。

MP3やWMVからHE-AACへの変換はできない

実際に使ってみて気になるのは、iPod & iTunesと似ていると同時に、大きく違う点だ。

第1に、先に書いたとおりHE-AAC形式以外の音楽ファイルは、ケータイ側もMusic Portもまったく再生できない。さらに、MP3やAAC、WMAなどパソコン上でよく利用されている形式の楽曲データを取り込んで、HE-AAC形式に変換する機能も用意されていない。これまでiPod & iTunesなどを利用してMP3形式などで楽曲ライブラリーを構築していても、LISMOを利用するためには最初からライブラリーを構築する必要があるのだ。

せっかく大容量HDDを搭載しているのであるから、MP3形式やAAC形式の楽曲データをそのまま再生できるようにしてくれれば、さらに音楽プレイヤーとしての使い勝手は向上するのだが、このあたりは、auというケータイキャリアが提供するサービスであるため、コンテンツプロバイダーやレーベルなどの意向を無視できないのであろう。

すでに日常の生活必需品となって、手荒に扱われることが多いケータイに、HDDを搭載するのはコスト的にも技術的にも決して簡単なことではなかっただろう。そういった課題をクリアして、HDD搭載ケータイを市場に投入したことは評価できる。しかし、ソフトウェアの使い勝手や、総合的な音楽リスニング環境としては、よりいっそうの進化を期待したい。

[Reviewer's View]

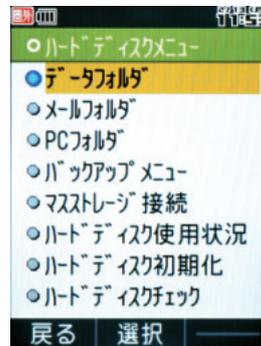
au Music Playerの機能でおもしろいのが「プレイリスト交換」と「うたとも」だ。プレイリスト交換は、自分が作ったプレイリストをメールで交換して、受け取ったプレイリストで好みの楽曲があれば直接ダウンロードサイトから購入できる。うたともは、ユーザーの好みを分析してオススメの曲をリコメンドしてくれたり、再生回数ランキングの表示したり、プレイリストやコメントを公開したりといったことができる、ケータイ上で広がる新しいコミュニケーションサービスだ。



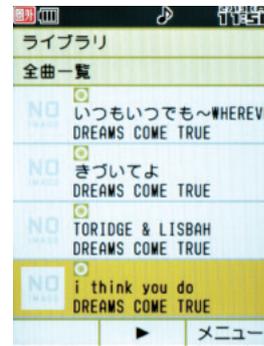
W41Tは、日本初のHDD搭載ケータイであり、4GBという大容量ストレージを装備していることが最大の魅力だ。その代わりに28mmとやや厚く、重量も約157gと重めだ。

W41Tは、日本のケータイとして初めてHDDを内蔵し、音楽機能を重視したCDMA 1X WIN対応ケータイだ。内蔵HDDは東芝製0.85インチHDDで、容量は4GB。HDDの周囲をゲル状の衝撃吸収材で包み、その周りを金属製シールドケースでカバーすることで、耐衝撃性を確保している。auの総合音楽サービス「au LISTEN MOBILE SERVICE」に対応し、約2000曲分の楽曲を保存できる。液晶は2.4インチQVGAで、323万画素カメラを搭載するほか、Bluetoothもサポートする。

W41Tはコーデックに圧縮効率の高いHE-AACを採用しておりビットレートも最大48kbpsなので、音質はそこそこだが、外で気軽に音楽を楽しむには十分であろう。単体で「着うたフル」をダウンロードして聞けるというのは、ほかの音楽プレイヤーでは真似のできない芸当である。



PCと接続し、「マストレージ接続」を選べば、512MB分の領域が認識される。アドレス帳などのデータをHDDにバックアップすることも可能。



音楽プレイヤーソフト「au Music Player」。アーティスト一覧やアルバム一覧から曲を検索できるほか、プレイリストの登録/再生も行える。

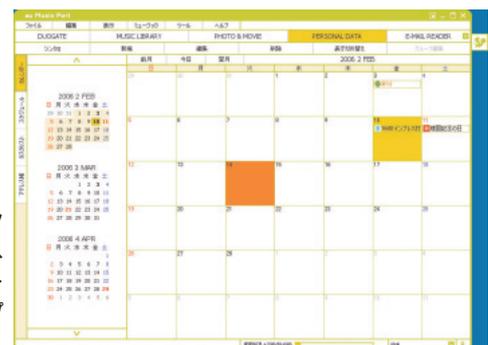


W41Tのメニュー画面には、ハードディスクやBluetooth、Music Playerのアイコンが並んでいるせいか、パソコンのような雰囲気。



付属の音楽管理ソフト「au Music Port」によって、音楽CDからのリッピングやW41Tへの楽曲の転送、「着うたフル」のPCでのバックアップなどが可能。

au Music Portでは、ケータイのスケジュールやアドレス帳、メール、フォト、ムービーなどのデータのバックアップや編集、シンクロも行える。



iMac 17 インチ

(アップルコンピュータ)

歴史的なインテルアーキテクチャへの スイッチでアップルが得たものとは？

予定を大幅に前倒して Intel Mac がリリース

アップルコンピュータは、1月11日に液晶一体型「iMac」2機種と、ノート型の「MacBook Pro」2機種を発表した。

これらの製品は、Macとして、初めてインテルアーキテクチャを採用していることが特徴だ。これまでMacではCPUにPowerPCを採用してきたのだが、性能向上ペースが落ちたことや、ノートPC向けの低消費電力版製品の投入が遅れているなど、ロードマップに不安を抱えるようになった。

そこでAppleは、2005年6月に開催された開発者向け会議「WWDC 2005」の基調講演において、2006年6月までに、インテルアーキテクチャを採用したMacを投入することを発表した。

今回のiMacとMacBook Proは、WWDCで示された期限から半年近く前倒して、発表されたことになる。なお、iMacは発表から数日後に出荷が開始されたが、MacBook Proの出荷は2月中旬となった。

この新型iMacおよびMacBook Proは、CPUとして、インテルの最新デュアルコアCPU「Intel Core Duo」を搭載する。Intel Core Duoは、開発コードネームYonahと呼ばれており、主にモバイル向けとして開発された製品だ。デスクトップ向けCPUであるPentium 4やPentium Dに比べて、消費電力が小さいことが特徴だ。Intel Core Duoは、発熱も小さいため、ノートPCだけでなく、液晶一体型PCやスリムPCなどにも向いている。

デスクトップパソコンとして 世界で初めてCore Duoを搭載

しかし、現時点で発表されているIntel Core Duo搭載のWindows PCはノートPCばかりであり、デスクトップPCでIntel Core Duoを搭載したのは、iMacが世界初となる。このことから、Appleがインテルアーキテクチャへのスイッチに大きな期待をかけていることが伺える。

もちろん、新型iMacやMacBook Proの開発にあたっては、インテルも多大な協力を行っている。

新型iMacは、筐体のデザインやサイズは、昨年10月に登場したiMacとまったく同一だ。Windows PCの世界でも、省スペース性の高い液晶一体型PCが増えているが、iMacのデザインはやはり秀逸である。液晶ディスプレイ部分に本体が内蔵されているわけだが、厚みが薄く、単なる液晶ディスプレイに見えるほどだ。新型iMacは、Intel Core Duoの採用によって、従来の2倍のパフォーマンスを発揮するとされている。

新型iMacではOSとして、Mac OS X v10.4.4 Tiger(以下Tiger)を搭載する。Mac OS Xのインテル対応版がリリースされるのはもちろん、これが初めてとなるが、Apple社内では、2001年に登場したMac OS Xの最初のバージョンから、インテル対応版としてビルドされたバージョンが存在していたという。つまり、一朝一夕にインテル対応版が作られたわけではなく、継続して開発が行われてきたのだ。

Power PC用アプリを トランスコードで動作させる 「Rossetta」

インテル対応版のTigerは、PowerPC版のTigerとUIや機能が同一なので、Macユーザーなら、違和感をまったく感じることなく移行でき、x86ネイティブコードで書かれているため、CPUの性能をフルに引き出すことができる。

ただし問題はアプリケーションだ。x86とPowerPCの両方のネイティブコードを含むアプリケーションは、ユニバーサルバイナリーと呼ばれ、インテルアーキテクチャでもPowerPCアーキテクチャでも、最高のパフォーマンスで動作する。すでに、標準搭載のウェブブラウザ「Safari」、メーカーの「Mail」、最新のアップル純正の「iLife '06」がこれに対応している。サードパーティ製アプリケーションでは、QuarkやMicrosoft Officeの次期バージョンがユニバーサルバイナリー化される予定だが登場時期は未定だ。

このように、現状ではユニバーサルバイナリー化されたアプリケーションはまだそれほど多くない。そこで、Intel Macには「Rossetta」と呼ばれるバイナリートランスコード技術を搭載し、従来のPowerPC用アプリケーションをそのまま動作可能になっている。ただし、Rosettaでは、コードをx86ネイティブに変換して実行する仕組みなので、変換のオーバーヘッドが生じて、パフォーマンスが低下してしまうが、CPUパワーが向上しているので実用にならないというレベルではない。

Appleは、PowerPCを捨て、インテルアーキテクチャに路線を変更したことで、今後も継続的なCPU性能の向上が約束されたことになる。これがMacのシェア拡大につながるは微妙なところだが、高性能なノートPCを待ち望んでいたMacintoshユーザーにとって、インテルアーキテクチャへのスイッチは歓迎すべきことであろう。

[Reviewer's View]

Intel Core Duo搭載iMacは、筐体のデザインだけでなく、OSのUIや機能も従来と同じなので、アーキテクチャの変更を意識せずに使える。シームレスに移行できることは、従来からのMacユーザーにとって歓迎すべき点だが、現在Windows PCを利用しているユーザーが、Macintoshに積極的にスイッチする必要があるとは思えない。しかし、x86ネイティブ動作のWindows PCエミュレータが登場すれば、それがキラーアプリケーションとなる可能性はある。

iMac 1.83GHz Intel Core Duoは、Macintoshシリーズで初めてインテル製CPUを採用した液晶一体型マシンだ。CPUに最新デュアルコアCPU「Intel Core Duo」を採用。OSとして、Mac OS X v10.4.4 Tigerを搭載する。筐体のデザインやサイズは、昨年10月に登場したPowerPC G5搭載iMacと同じで、17インチワイド液晶(1440×900ドット表示)を搭載。カメラ「iSight」を内蔵するほか、10フィートGUI「Front Row」の操作が可能な赤外線リモコンが付属することも特徴だ。



iMac本体にはIntelのロゴシールなどは着いていないが、パッケージには「intel Core Duo」の文字が見える。



液晶上部には、カメラ「iSight」が内蔵されており、「iChat」などで利用できる。

右側面には、スロットインタイプのSuperDrive(DVD+R DL対応)が搭載されている。



appleのコンピュータ	
ハードウェアの構成:	
アプリケーション	コンピュータ名: iMac
フロント	コンピュータの種類: iMac4,1
フレームワーク	CPUタイプ: Intel Core Duo
ログ	コア数: 2
機能拡張	CPU周波数: 1.83 GHz
電源設定パネル	二次キャッシュ (共有): 2 MB
起動項目	メモリ: 512 MB
ネットワーク	バス速度: 667 MHz
AirMacカード	ブート ROM のバージョン: IM41.0039.800
ネットワーク接続	シリアル番号: W86024VQU2N
ファイアウォール	モジュール: SMCバージョン: 1.1f2
ポリューム	
モデム	
ハードウェア	
ATA	
Bluetooth	
Fibre Channel	
FireWire	
PCカード	

iMac 1.83GHz Intel Core Duoのシステムプロファイラ。CPUタイプの「Intel Core Duo」という表示と、コア数が「2」となっている点に注目。

本体背面には、USB 2.0 × 3、IEEE 1394 × 2、ヘッドホン出力、ライン入力、LAN、Mini-DVIの各端子が用意されている。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp